「インドネシア異文化体験プログラムで学んだこと」

城土 大峯（現代ビジネス学部 国際社会学科）

今回のバリ・スンバワ実習に参加して、たくさんの経験を得ることができました。海外に行くのが初めてだったこともあり、見るもの全てが初めてのもので、驚きの連続でした。

12 日間の海外実習の中で、僕はみなが求める「幸せ」について何度も考えました。

僕は日本にずっと住んでいるので、当たり前にシャワーからお湯が出て、体が疲れた日には湯船に浸かって、トイレも温かい便座で、トイレットペーパーも流せて、食べたい時に食べたいものを食べ、綺麗な場所でご飯を食べる生活に慣れていました。この「当たり前」が、幸せなことなのだと改めて気づきました。

マハサラスワティ大学のダウドやパブロなどのバディのみんなは本当に本当に優しくて、賢くて、実習期間中、自分たちの授業やそれぞれの悩みや事情があるはずなのに、朝から晩まで僕たちのことを考え、行動してくれました。みんなみたいな優しい人間が幸せになるべきで、幸せになって欲しいと強く思いました。でも、僕にはどうにもできないもどかしさも感じました。

しかし、彼らをみていると、いつも笑っていて、何をするにも楽しんでいました。その姿を見て、僕が求める「幸せ」の基準が高すぎるのだと気づきました。幸せの価値観は人それぞれであり、彼らは全ての状況を楽しむことができる、「楽しめること」自体が幸せなのだと僕は気づきました。

また、スンバワでもディアマレラ学校の生徒たちに驚きました。自分たちより年下の生徒たちはすでに母国語以外の言語を習得していて、ものすごく賢い学生が集まっていました。私たちはほんの少ししか英語を話すことができないので、最初はコミュニケーションがうまくとれませんでした。山奥にある学校で、どこにも遊びに行けない、コミュニケーションもとれない、電波も届かない、このような環境で何を楽しめば良いか正直分かりませんでした。ぼーっと時間が過ぎるのを待とうと考えていました。しかし、ディアマレラの学生が私たちのところに来て、日本や僕たちの話が聞きたいと言いました。Google 翻訳を使いながら、話しているうちに、ここにいる学生たちは、日本人という珍しい人種に興味津々で色々な質問をしてきてくれているのに、僕たちがこんな気持ちが沈み、ぼーっと時間が過ぎるのを待つのは失礼だし、バカなことをしていると気づきました。そこから、学生たちとフットボールをしたり、たくさん話したり、先輩の田淵くんと全てのことを全力で楽しみました。何もかもを全力で楽しむことで新たに見えてきたものがありました。2 日目の夜、初日は見る余裕も無かった星を田淵くんとみながら「幸せ」について話しました。田淵くんも僕と一緒のことを考えていたそうで、すごく深い会話ができました。今までの人生で 1 番綺麗な星空でした。

バリの生活でもスンバワの生活でも共通して感じたことは、「幸せの価値観」でした。それ

ぞれ求める幸せは違い、どこにいてもどんな生活をしていてもみんな幸せを求めて生きているのだと気づきました。分かってはいたことではありますが、改めて気づかされました。

また、日常から離れて海外で生活することは、自分の人生にとってものすごく必要なものだと知りました。日本と全く違う文化に触れ、体験することで、現地の人がどのように考えているのかを知ることができ、自分の人生について深く考える機会となりました。

さらに、このような経験を得ることができたのは、マハサラスワティの先生やバディをしてくれた学生、ディアマレラの先生や学生、引率してくださった大形先生、一緒にインドネシアにいった先輩方やインドネシア語の話せるタリサのおかげです。ほんとに感謝しています。僕の人生にとって素晴らしい経験で、大きな財産になったと思います。